

あけのほし 2012年7月1日

「神の名はアッバ」

菊田 行佳

「神の霊によって導かれる者は皆、神の子なのです。あなたがたは、人を奴隷として再び恐れに陥れる霊ではなく、神の子とする霊を受けたのです。この霊によってわたしたちは、「アッバ、父よ」と呼ぶのです。この霊こそは、わたしたちが神の子供であることを、わたしたちの霊と一緒にになって証ししてくださいませ。」

(ローマ人への手紙8章14-16節)

「名は体を表す」という言葉があります。名前はそのからだの中身を良く言い表しているものだということです。例えば、父と子の関係を見た時、その子どもが父親のことをなんと呼んでいるのかを見れば、その関係がかなりの程度、分かってきます。「お父様」と呼ぶか、「おやじ!」と呼ぶかで、ずいぶん父子の関係は違います。

このことは、人と神さまの関係においても同様なことが言えます。神さまに向かって、なんと呼ぶかでその人と神さまとの関係がよく分かります。では、キリスト教の創始者、イエスさまはなんと神さまを呼んだのでしょうか? イエスさまは、神さまのことを「父」と呼んでいました。ただ、神さまを父と呼ぶのは、当時においてそう珍しいものではありません。イエスさまが、他の人々と極めて違っていたのは、その「父」という呼び方の中でも、年齢的な特徴を帯びていたことです。イエスさまは、神さまのことを「アッバ」と呼んでいたのです。この「アッバ」というのは、幼い乳飲み子が、始めにお父さんに向かって呼ぶ呼び方です。ちょうど今の子どもたちが「パパ」と呼ぶのと同じです。そして、子どもが成人してからも、極めて親しい親子関係の間柄では、「アッバ」と父親を呼ぶことがありました。ですから、イエスさまにとって神さまは、生涯に架けてずっと「アッバ」なのです。生まれた時から、死ぬ時まで、ずっと「アッバ」と呼ぶことの出来る神さまなのです。人生の中には、当然良いことだけではなく、嫌なこと、苦しいことが沢山あります。このことは、神の子であるイエスさまにも当てはまることです。それどころか、聖書において記されているイエスさまの生涯は、決して喜びばかりの生涯ではありませんでした。人々から慕われる一方、多くの人々から嫌われ、傷つけられました。そして、最後は誰も親しい人がいないところで、罪人として極刑である十字架刑に掛かって一人死んで行きました。そのような、悲しみの多い、痛みの多い御自身の生涯の中で、どうしてイエスさまは、神さまに向かって「アッバ」と呼び続けられたのでしょうか? 見方によっては、イエスさまを死の間際まで、ほっぽり出しておいた父のような神さまにも思えます。ですが、それでもイエスさまは、神さまを「アッバ」と呼ぶことをお止めになりませんでした。イエスさまは、死の直前にゲツセマネという所で、神さまに向かって祈りをなさいました。その時、イエスさまは神さまを「アッバ」と呼んだのです(マルコ福音書14章36節)。

どうしてイエスさまが神さまのことを生涯「アッパ」と呼び続けたのかということについて、聖書では説明はされていません。ただ、死の間際までイエスさまが神さまを「アッパ」と呼び続けたことを、クローズアップして述べるだけです。それは、この幼い子どもと父親の関係を表す「アッパ」というイエスさまの呼びかけの意味は、言葉では説明できないからです。イエスさまの神さまに向かった「アッパ」という呼びかけは、頭先从足つま先まで、全存在を賭けた、いのちの奥底から湧き上がってくる「呼びごえ」なのです。そのことは、決して言葉によって置き換えられるものではありません。それは、イエスさまが歩んだように、その生涯の間で、何度となく、神さまを「アッパ」と呼びかけて行くことでしか、分からないことであるでしょう。イエスさまが、その御自身の死の間際に、「アッパ」と呼びかけられたことは、自分も同じように、死を前にして「アッパ！」と叫ばない限り、知る事の出来ないことなのです。

イエスさまの弟子たち、最初のキリスト教教会の人々は、皆、イエスさまに倣って、神さまを「アッパ」と呼んでいました。今日の聖書箇所を記述したパウロという弟子は、「アッパ」と神さまを呼ぶことが出来るかどうかで、実際に神の子と自分たちがされているかを判断するものとして取り上げています。そしてこの世界の中で起こる困難に遭った時、恐れに留まることがないかどうかの分かれ道となっているのだと言います。神さまの所からイエスさまが送る「霊」によって捉えられた時、神さまを「アッパ」と呼べるのだということです。もし神さまが、人々にとって、本当に「アッパ」と呼べる神さまなのかどうかを知りたいのなら、イエスさまが御自分についてきなさいと言った道を歩むしかありません。人生の中で出会ってしまう、一つ一つの苦しみの中で、「アッパ！」と叫ぶしか、アッパからのこたえは返っては来ないのです。もし、その中で、一言でも、「アッパ！ どうしてこんな目に、私を遭わせるのですか？」などと叫ぶことが出来たのなら、それはもう神さまを「アッパ」と呼ぶことの出来るイエスさまの霊に捉えられたのだと言って良いでしょう。そして、きっとアッパは、こたえを返してくれるに違いありません。その時には、なんでイエスさまが、神さまを「アッパ」と呼ぶことが出来たのかということの、一端でも知ることが出来るのではないかと思います。

この神さまを「アッパ」と呼ぶ呼び方は、残念ながら現代のキリスト教の中では、あまりありません。それに伴い、神さまと人との関係は、随分疎遠になってしまっているように思われます。もう一度、イエスさまが、そして初期の弟子たちが神さまを「アッパ」と呼ばれた、ダイナミックな親しい関係を、取り戻さなくてはならないと私は考えています。たとえ見えなくても、幼い子どもを見捨てない「アッパ」は、どのような時にも共に、側にいてくれていることを、お伝えしたいと願います。